

## 課題図書の一部 優秀賞

### 来間れいなさん 文学部現代社会学科1年

課題テーマ：大学とはなにか

『先生は教えてくれない大学のトリセツ』田中研之輔著 / 筑摩書房

#### 「主体的な学びの宝庫」

「何のために学んでいるのだろう」ふと疑問に思ったことはないだろうか。大学の学問は学術的で正解がない。これらを直接生かした進路は限られている。ゆえに大学で学ぶことに意義を見出せない学生が存在する。そんな彼らへのメッセージが綴られた一冊を紹介したい。本書は学内外の活動に関する助言をまとめた第1～4章と、教育機関としての大学の実情を示す第5章から構成されている。著者は大学教員であるため教員目線のアドバイスは説得力があり、どれも実践可能なものばかりだ。

大学の学業を充実させるためには、話を聞く力、意見を述べる力、書く力が欠かせない。本書は、これらの能力を高めるための具体的な方策を提案する。例えば、講義中に質問メモを作るというものだ。問いを設定することで、受け身から能動的な受講態度へと改めることができる。またプレゼンや論文作成など、大学の学びは意見の発信にも力を入れている。何度も人前で話し、レポートを書き、学業の集大成として卒論を仕上げる。この過程で将来役立つスキルを学友と共に磨けるのは、大学生ならではの特権なのだ。

「学び」という言葉は、机上の討論だけを意味するのではない。アルバイトやインターンシップは、身体を使った実践的な学外の学びである。学生でありながら働くことは、コミュニケーション能力を高め、幅広く人間関係を構築するなどお金を稼ぐこと以上に多様な意味を含む。また現在アルバイトが順調であれば、新しい業種に挑戦してみてもどうだろうか。異なる環境に身を置き適応する経験は、変化の激しい現代社会を生き抜く訓練となるからだ。一方、理想と現実のギャップに苦しむこともある。スケジュール管理、慣れない仕事、社会人の厳しい態度。そのような困難にぶつかった時にどう対処し、どう精神を保つか。打開策を見出し実行に移すことは、人として成長できる機会となる。

著者曰く、大学は生ものである。学生が腐れば教員も腐り、逆もまた然りということだ。大学生と教員双方に関わる問題の中で最も身近なものは、講義への向き合い方だろう。大学合格という目標を達成した途端、学びの方向性を定められず日々の講義を疎かにする学生。私語、居眠りなど学習環境を乱す行為を教員が目に入れば、指導する側は精神的な負担を抱える。また教員の指導力不足は、学生の学習意欲低下を招きかねない。大学の学びとは自発的な目標設定が不可欠であり、研究を本業とする大学教員の指導力向上は長年の課題であるということ。この現状を双方が理解し互いに歩み寄ることで、大学教育の質を高められるはずだ。

卒業後は就職を目指す学生にとって、大学4年間は「学生」という肩書きを生かせる最後の期間。自由度の高さは、興味の赴く環境に飛び込み自己を磨ける可能性を意味する。学業に打ち込む、アルバイトを通じて実社会とつながる、サークルや課外活動に参加し多様な価値観と出会う。どの活動に重きを置くかは、学問と同様正解がない。大切なのは、何事も目的意識を持って取り組む姿勢を続けること。著者は、大学生の有意義な学生生活を願ってやまない。